

相談員の深い話?

子どもアシストセンターのホームページの「コラム」から

こんにちは、アシストです



子どもアシストセンターのホームページでは、7名の相談員のほか救済委員などのスタッフが、子どものことなどについて気づいたこと、感じたことなどをコラムとして月替わりでお届けしています。

今回は、その中から一部をご紹介します。

「あ~いつの間にか!」

新井相談員 (H27.3退職) …2013年4月のコラムより抜粋



ワタシが託児施設でボランティア活動をしていた頃、一人のガキ大将がいました(入所時1歳)。3人兄弟の末っ子で押されても倒されても泣かないとても強い子でした。普段の家庭ではきっとお兄ちゃんたちと争うようにおもちゃを取り合って負けないように過ごしてきたのだと思います。託児施設には彼よりも小さい子たちもたくさんいて、おもちゃを奪ったり、奪われたら反撃したりという行動が目立つて見えるようになりました。「順番」「小さい子には優しくしてあげてね」……。

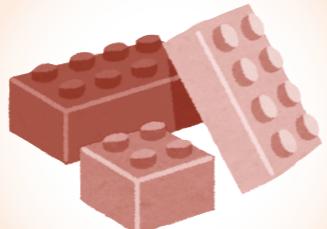
我慢しなくてはいけないような場面では、彼の顔に悔しさの色が表れることがありました。次第に自らおもちゃを貸してあげたり、借りる時も「貸して」というような場面が見えるようになってきました(もちろん、ご家庭での教育のおかげでもあります!)。

● ● ●

そんな彼がある日おもちゃのブロックで高い高い塔をつくなっていたところ、彼よりも少し小さな子がその塔を倒してしまったのです。「怒っちゃうかな?」「泣っちゃうかな?」そんな心配がワタシの顔に出ていたのでしょうか。彼はワタシの顔をしっかりと見つめ、「だいじょうぶだよ。ぼく、またつくるから! しんぱいしないで!」そんな風に言っています。3歳の子からこんな言葉が出てくるとは思いもよらず、少し目頭が熱くなっていました。塔が倒れて悲しかったのは彼の方なのに、慰めるどころかこちらが慰められてしまいました。彼が発した言葉はきっと自分自身への慰めの言葉でもあるのだと思います。大人から普段かけられている言葉が彼の中に染み込み、「大変だな」「悲しいな」と思った時に、自分の口から出てきたのだろうと思います。そのあとは2人でもっと大きい塔を作りました。ちょっと動搖が顔に残っていましたが、楽しそうに作っていて気持ちの切り替えの面でも成長でき始めているんだなと実感させられた一日でした。

● ● ●

こんな小さい時の場面に限らず、中高生たちも気付かぬうちに成長しています。親や周りから与えられた言葉は今はまだ反発しているように見えることもあります。言葉は自分のものになって初めて意志となります。自分の中で整理する間もなく「早く、早く」と急かされていては、納得したものとして行動ができないのです。彼らが彼らの意志として行動する時、その時を大人はゆっくりと待つことも必要なのです。



子どもアシストセンターのホームページに掲載したコラムは、これまでに**77本!**

バックナンバーで全て読めます。

子どものことを考えるにあたって、きっと参考になる話もあるでしょう。ぜひ一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

http://www.city.sapporo.jp/kodomo/assist/index_02.html

子どもアシストセンター 検索

「こんなふうに見てごらん」

新岡相談員 …2015年4月のコラムより

動物行動学者として活躍された故・日高敏隆さんのエッセイの中に、日高さんがマツノキハバチ(松の黄葉蜂)というハチの研究をしていた時の話が載っています。

このハチを調べるために、日高さんは標高3,000メートルにある木曽駒ヶ岳の頂上付近のハイマツの葉についている幼虫を捕ってきて、自分の研究室で飼いはじめました。温度を25℃に保つてマツノキハバチの幼虫を飼いましたが、2、3日のうちにほとんど全部死んでしまいました。何かバクテリアかウイルスでもいるのかと調べてみても、何の原因も見当たりません。



● ● ●

困ってしまった日高さんは、次に、ハチを冷蔵庫に入れて、5℃の低温に保つ条件で飼ってみたそうです。こちらは生きてはいるのですが、葉っぱを全然食べないので、15日ぐらいするといつせいに全部ぱつと死んでしまったそうです。次の年は、湿度調整などをしてみても、それに関係なく全部死んでしまい、その次の年もそうだったそうです。

失敗が続き嫌になっていた4年目に、温度を一定にしなくては研究にならないと思っていたが、それがいけないのかもしれない、ふつと思いついたそうです。

そして、日高さんは、昼間はハチを25℃のところに入れておき、夕方帰るときには5℃の冷蔵庫に入れたそうです。実際の山の上の温度と同じように、25℃と5℃を半日ずつ交代させてみたら、ハチの死亡率は、なんと2%に下がったのです。

● ● ●

日高さんは、エッセイの中で「25℃一定にして飼うと3、4日で全部死んじゃう。5℃一定にして飼うと15日ぐらいで全部死んじゃう。しかし、この全部死んじゃう25℃と、全部死んじゃう5℃を、半分ずつ組み合わせると、大きさに言えばほとんど全部生きた。ぼくは、あれほど感激したことはありません。」と述べています。

このエッセイが収録されている日高さんの本の題名は、「世界を、こんなふうに見てごらん」なのですが、マツノキハバチの研究の実話は、私たちのものの見方、考え方方に、多くのことを教えてくれているような気がします。



「25℃」の中で頑張ってペしやんこにされ、「5℃」の状態でもがいでへこたれたとしても、あきらめるにはまだ早い。全然ダメな「25℃」と、全くお話にならない「5℃」を半分ずつ組み合わせると、劇的に変わることもあるのだ。一つの視点だけではなく、いろいろなところから柔らかく考えてみたらどうだろう…。

「こんなふうに見てごらん」と、日高さんは話してくれているような気がします。